

出典：マイクロクレジット(小規模融資)と  
マイクロファイナンス(小規模金融)とコミュニティ開発について  
アジアのマイクロファイナンスの事例から：  
コミュニティビジネス 新たなる就労創出一个から全体へ

2010年1月12日 稲本建築設計室 稲本悦三

■ はじめに

皆さん、『マイクロクレジット』という言葉をご存知でしょうか。『マイクロクレジット』という言葉は、2006年、バングラディッシュでグラミン銀行を創設したムハマド・ユヌスさんがノーベル賞を受賞されてから色々な所で聞くようになりました。『グラミン』とはベンガル語で『農村』という意味です。グラミン銀行は1983年にこれまで銀行とは疎遠であった農村の貧困層の女性を対象に無担保小口融資事業を始めました。ここで大切なのは、何故ユヌスさんがマイクロクレジットの制度で『グラミン銀行』として事業を始めたか、です。又、同じような時期に、スリランカやインドではCBOの女性を中心にマイクロファイナンスとして『女性銀行』の活動が始まりました。ここで注意をしていただきたいのは『マイクロクレジット』と『マイクロファイナンス』の同意点と相違点です。本稿では、『マイクロクレジット』と『マイクロファイナンス』の同意点と相違点を明らかにし、これらが如何に『コミュニティ開発』に繋がっているか、アジアの開発事例を基に考察したいと思います。

最近、日本国内でも『市民バンク <http://www.p-alt.co.jp/bank/>』が出来ました。又、市中の金融機関で『NPO』を対象に低利で融資事業を行っているところもあります。このような制度を利用して『コミュニティビジネス』の考えが出てきました。『コミュニティビジネス』とは、「地域の人々が主体となって、地域の社会資源を活用して、地域の抱える課題をビジネス的手法で解決し、コミュニティの再生を通じて、その活動で得た利益を地域に還元すること。」(ウィキペディア)です。

◇ 金融機関へのアクセスとその負

まず、都市及び農村の貧困層がお金を借る場合、アクセスするフォーマル・インフォーマルな金融機関について考えていきたいと思います。

貧困層の人々が小口融資を受けたい場合、フォーマルな金融機関といえば市中銀行が挙げられますが、市中銀行から融資を受ける場合、保証人や担保、その他必要な書類の内容を把握し、書類に必要事項を記載しなければならないなど色々な条件が必要になります。貧困層にとって保証人になりうる人や担保が無く、また字の読み書きが出来ない人が多くいるため猥雑な書類など内容の把握も出来ず、必要な記載も出来なくて融資を受けることはできません。又、融資額も余りにも小口で返済出来る信用も無いので借ることが出来ません。

では、お金が必要になった時は、この場合は緊急時が非常に多くありますのでインフォーマルな金融機関に行きます。都市であれば民間の金融機関、高利貸しと言われている人たちから借ります。農村であれば地域の実力者か又は地主からお金を借ることになります。インフォーマルな民間の金融機関の利子は非常に高利です。高利貸しに返済できない場合、他の返済方法として人身売買、臓器売買に巻き込まれる場合もあります。又、農村であれば従前の借入金が返済できなく更に高利でお金を借るため、子や孫の代まで返済に追われる永久小作か農奴になる状況です。地主の支配からの脱出は考えられません。この為、現金収入を得るため土地を捨て都市に出て行く場合が見られます。都市並びに農村において負・貧困の連鎖を断ち切ることは出来ません。

## ◇ マイクロクレジット(小規模融資)について

では、マイクロクレジット：小口無担保融資の事例としてグラミン銀行の場合をみていきましょう。

グラミン銀行の場合は、インフォーマルな金融機関でしかマイクロクレジットにアクセスできなかった人々に、フォーマルな金融機関としてマイクロクレジットにアクセスできる銀行として設立しました。無担保融資、書類の透明化と簡素化、金利は市中銀行と同じです。あくまでも銀行として機能し、貧困層の人々に施すとか、第2級市民として金融機関へのアクセスを行うということではありません。貧困ではあるが、適正なアクセスさえあれば返済できる人々だ、という人権尊重の精神の考えがあります。

グラミン銀行の場合、無担保融資ですが、返済のリスクを減らすため女性5人組に対して融資を行う、としています。これは最初の融資を受けた2名の人が返済をした後、残りの人が借入れを行うことが出来るというシステムです。無担保融資とっていますが、5人の連帯を担保としたお互いの信頼関係で融資システムが成り立っています。グラミン銀行では設立時には貯蓄業務部署はありませんでした。あくまでも小口無担保融資を行い、返済金を管理する金融機関でした。

又、グラミン銀行からの借入金は事業に使用するためのもので、生活のために使用する融資ではありません。そして、あくまでも個人の事業に対しての小口無担保融資、マイクロクレジットです。個人のエンパワメントのみです。女性を対処にしたのは、女性は必ず返済する気持ちを持っており、女性の地域や家庭での地位向上と、女性が豊かになれば融資を受けて行った事業からの収益の金は、住宅の改修、食生活改善や子供の教育など家庭のために消費され、生活の質の向上に貢献すると考えられたからです。現在、グラミン銀行は貯蓄や社会事業も行っています。

## ◇ マイクロファイナンス(小規模金融)とコミュニティ開発について

次に、マイクロファイナンス：貯蓄制度も含めた小口金融について話します。

マイクロファイナンスは、貯蓄だけ、小口無担保融資、貯蓄と小口融資の事業に分かれます。ここで皆さんに考えていただきたいのは貯蓄だけ、又は貯蓄をして小口融資を受ける場合、フォーマルな金融機関で毎日又は毎週5円、10円の貯金を快く受け付けてくれるでしょうか。余りにも小口で相手にされません。又、フォーマルな金融機関であれば貯蓄するための口座を作る場合身分証明書や猥雑な書類に記載しなければなりません。

マイクロクレジットのところで話したように貧困層の多くの人は字の読み書きが出来ませんし、又身分証明書なども持っていません。これから話しますマイクロファイナンスとはフォーマルな金融機関ではなく、インフォーマルな金融機関として捉えてください。つまり、貧困層の人々が緊急にお金が必要になった場合、先ほどのマイクロクレジットでお金を借りることも考えられますが、このインフォーマルなマイクロファイナンスの場合は、緊急時にお金が必要になるので貯金をしようという予防的貯蓄の考えが先にあります。

先ほど言いましたようにフォーマルな金融機関では貯蓄できませんので、個人の有志が集まりインフォーマルなシステムで貯蓄を始めます。お金を集める人、貯蓄されたお金を管理する人などが必要になってきます。皆さん、この場合、信用できない人にお金を預けることが出来ますか。では、誰が、という話になってきます。ここで、コミュニティ開発の理念と重なってきます。地域の中の間人関係の信頼を築いていく、そして、お互いが毎日、又は毎週、顔を合わせるにより日常会話の雑談を通してお互いが抱える問題を共有し、この問題の解決策を考えていく。そして、ただお金を貯蓄するのみでなく、お互いの結束を高め、メンバーの同意により融資を必要とする人に対して貯蓄額を担保にメンバーの貯蓄されたお金を有効に使用していく、小口融資を行っていく。このお金は個人が生活費としても事業費としても使用してかまわない、情報の共有におけるお互いの信頼関係と結束を基に返済が行われることをお互いが納得しているからです。

又、個人の生活の質の向上のみでなく、メンバー全体の生活の向上などを求めてコミュニティ・ビジネスに取り組む人たちもいます。地区住民が主体となった持続したコミュニティ開発の手法としてのマイクロファイナンスの活動の一つとしてセイビング・アンド・クレジット（貯蓄と小口融資）を捉えています。女性を対象にしたのはマイクロクレジットのところで話した内容と同じです。又、この様に小口で集めたお金は時間が経ちますと大きな金額になります。大きな金額になった時フォーマルな金融機関に赴き、フォーマルな貯蓄を行います。これまでフォーマルな社会や金融機関から排除されていた人々が、この行為によりフォーマルな社会の一員として認められることは人間の尊厳を取り戻すことです。これらの行為は、個人が抱えるリスクの減少と、各個人のエンパワーメントにもなりますし、個から全体へ、コミュニティの資産形成、発言力、交渉力や組織力を高めます。現在では新たな国内外のネットワーク形成も見られます。

#### ◇ 建築・都市計画を学ぶということと、コミュニティ開発を学ぶということ

マイクロクレジット、マイクロファイナンス、セイビング・アンド・クレジットなど言葉が輻輳していたかと思いますがすこしは整理されたでしょうか。このマイクロクレジットとマイクロファイナンスの事業の一つとしてのセイビング・アンド・クレジットの違いを理解することは、コミュニティ開発を考えていく上でとても大切なことです。

これから私が紹介するアジアの各地域で行われているセイビング・アンド・クレジット活動を基に『多様な住民参加による持続したコミュニティ開発』の事例について、皆さんは共感したり反発したりすることがあるかもしれません。これらの開発を通して、私が「『コミュニティ開発』とはこれだ。」。また、「『コミュニティ開発』が現代社会に与える意義はこれだ。」、などと述べるものが求められるかもしれませんが、『解答は一つでない。』、と。今回紹介するセイビング・アンド・クレジットは一つのコミュニティ開発のツールであり、きっかけです。私達は当事者達が多様なツールに自由にアクセスできる媒介になる必要があるのではないかと思います。アジアを見ますと経済、政治、宗教、文化など国々により多様な相違点があります。また、問題も実施されている開発も多種多様です。各地域で行われている多種多様な開発経験をどの様に紐解いて、画一された考えではなく、複眼的な広い視点から各自の創造力と柔軟な考えで、どのように再度紡いでいくかが、コミュニティ開発（まちづくり）に関する私と皆さんに与えられた課題だと思います。

何かを知ろうとするとき、これまでの頭のみで考えるのではなく、現場に入り、自分自身の目で見、歩き、肌で感じて、住民と一緒に飲食し、対話をし、泣き笑い怒り、体全体で知るということを感じとって欲しい。